

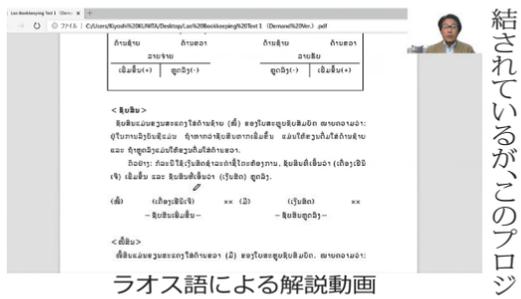
ラオス簿記プロジェクト

初級テキストと解説動画が完成

寄稿

研究プロジェクト代表 国田 清志 商学部教授

専修大学社会知性開発研究センターの研究プロジェクト「ラオス国内における簿記教育の発展・普及——ラオスにおける簿記テキストの開発と簿記検定試験の実施支援——」は2019年10月1日に設置され、これまで研究活動を行ってきた。20年度はコロナ禍の影響でラオスに渡航できず、現地での簿記講習会やインタビュー調査が実施できない困難な状況が続いている。そのような制限された



ラオス語による解説動画

中、21年1月にラオス語による簿記初級テキスト冊子資料とこれをラオス語で講義・説明した動画を作成した。今後、ラオスでの簿記講習会や簿記検定試験の実施に向けた取り組みの中で活用されるとともに、ラオスで簿記テキストとして出版されることが予定されている。

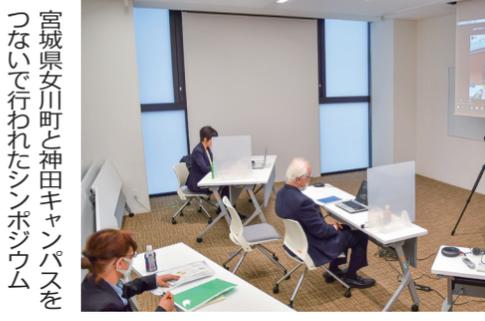
商工会議所との間に、「ラオス国内における簿記教育の発展・普及に係る協力協定」が締結されているがこのプロジェクトは協力協定の教育・研究のカテゴリーを担うものである。残念ながら20年度はラオス国立大学の客員教授の来日は実現できなかったが、ラオスから英語によるオンライン授業を実施するなど専修大学の学生とも新しい教育交流が生まれている。

なお、公益財団法人山田長満奨学会や日本・ラオスプロジェクト事業基金「ラオス国内の財政基盤の構築、簿記教育の発展・普及」の支援をはじめ、専修大学経営研究所の研究助成を受けている。この研究プロジェクトは、専修大学の社会知性の開発やグローバルなSDGsの一翼であり、ラオスと日本との国際交流を深化させるものになるであろう。

人文科学研 公開講演会 メキシコ征服の意義 6人の研究者が検証

人文科学研究所の公開講演会「1521——『メキシコ征服』再考」が2月26日、オンラインで開催された。1521年にスペイン人のコルテスによりメキシコが征服された500年の今年、その歴史的意義や現在に至るまでの影響を多角的に検証した。考古学、歴史学、文化人類学などのメキシコ研

研究者6人が講演とパネルディスカッションを行った。井上孝孝国際コミュニケーション学部教授(メキシコ史)が「メキシコ征服」の歴史的意義と題して講演。征服戦争には、それ以前にスペイン人に味方した多くの先住民も加わり、アステカ王国の覇権都市を陥落させた。「先住民は敗者ではなく、大多数は勝者側だった。西洋の歴史から見れば『1521年メキシコ征服』は意義あるものだが、メソアメリカ史では一都市の陥落に過ぎない」と述べた。



宮城県女川町と神田キャンパスをつないで行われたシンポジウム

「安全な社会」へ 実践例を報告

東日本大震災から10年。津波で亡くなった本学卒業生の田村健太さん(平20法)の遺志を語り、室を設立。それを記念したシンポジウム「いのちを大切に 安全な社会づくりをめざして」(専修大学法学研究所、同法社会学ゼミ、健太のちのちの教室主催)が3月6日、オンラインで開催された。

ご両親は、事故防止といのちの大切さを伝える活動を行っており、これまでの歩みを紹介。また、事故の遺族、弁護士、学者など20人以上が登壇

ネットワーク情報学部 「関東総合通信局長賞」



受賞を喜ぶ松永学部長(中央)と指導教員ら

ネットワーク情報学部が、デジタルコンテンツの制作環境を整え、長年にわたる学生の育成に取り組んできたとして、総務省関東総合通信局長賞を受賞した。



松永学部長から賞状を受け取る田辺さん(左)

20年度学部長賞に 杉田プロジェクト ネット情報 さん▽川崎悠介さん▽小林夢希乃さん▽後藤麗屈さん▽瀬川竜也さん▽高濱由貴江さん

授与式は2年次生ガイダンスの中で行われ、プロジェクトリーダーの田辺さんは「演習などでの専門的な学びがプロジェクトで生きてくる。しっかりと取り組むことで、後輩に語りかけた。

社会学科では毎年、上級生による学生生活案内と、懇親・交流会の2部構成で歓迎行事を実施しているが、昨年度は全て中止。今年度は1部のみの開催となった。

秋吉美都学部長が「大学では知識を総合して、物事の境界線を自分で動かして、大事になる」と述べ、各教員も「失敗を恐れず挑戦して」学びを楽

神保町映画祭に協力 黒門ホールで上映会

専修大学が東京神田神保町映画祭に協力し、3月13日、神田10号館(140年記念館)黒門ホールで上映会を開催した。映画祭は、映画を通して地域交流、自主映画の魅力発信などを目的に、作品上映やワークショップを開催している。今回は映画祭クランプリの授



賞式と、東日本大震災をテーマにしたドキュメンタリー映画『Life 生きてゆく』の上映および

び笠井千晶監督のトークライブを行った。運営には商学部・渡辺達朗ゼミ生も参加し、宣伝活動のほか、当日の会場設営や案内などを担った。渡辺教授は「これからも地域と連携した活動に取り組みしていきたい」と話した。

佐々木重人学長は「黒門ホールは地域の方に利用してもらいたい。今後も活用してほしい。大学としても地域の活性化、文化の発信に協力していきたい」と話した。

外国語のススメ 外国語教育研究室 中村 政徳 国際コミュニケーション学部教授 ことばは変化しています。いわゆる「規範文法」から逸脱し、「ら抜き表現」のように定着してゆくことがありますが、文法が乱れるのでしょうか。「ら抜き表現」に関しては、むしろ日本語文法を体系化(「可能」は全て「れ」で統一的に表す)していることが知られています。ことばの変化には経済性や規則性があるのです。規範文法では、形容詞や動詞を修飾するのは副詞ですが、最近(若者を中心に)次のような発話を頻りに耳にします。(1)その映画はすごいいい。(1)では副詞「すごく」の代わりに形容詞形「すごい」が使われています。興味深いことに、英語(主にアメリカ英語)でも同じようなことが起こってきています。(2)The movie's real good. (2)では副詞reallyの代わりに形容詞形realが使われています。どんな形容詞でもこのように使えるかというところではありません。(3)\*その問題は等しい重要だ(\*は当該言語で容認されないことを表す)。(3)では形容詞「等しい」ではなく、副詞「等しく」を使わなければなりません。(4)\*The issue is equal important. 同様に、(4)でも形容詞equalではなく、副詞equallyを使わなければなりません。なぜ「すごい」やrealは副詞的に使えるのでしょうか。同様に使えるものとしては、「えらい(副詞形は、えらく)やawful(副詞形はawfully)があります。何か規則性が見えてきませんか。外国語を学ぶ際には、新用法の裏には往々にして法則性があることを知っておくとよいでしょう。実際に人々が使っている「すごいリアルな文法」を意識してみてください。(言語学 <比較統語論>) 短縮版。全文はCALL教室ホームページで。

